



Adobe



EPSON

EXCEED YOUR VISION



Canon



QUICK  
COLOR  
MATCH

クイックカラーマッチ

# ホームプリント 新時代!

Talking about QUICK COLOR MATCH

## クイックカラーマッチとは

EIZO(モニター)、アドビ(ソフト)、さらにプリンタメーカーであるエプソンとキヤノンという4社のコラボによって生まれた、写真愛好家向け写真プリントソフトウェア。これまで難しいとされていたカラーマッチング(モニターとプリントの色を一致させること)の手順の大幅な簡略化を実現。メーカー間の垣根を越えて踏み出した「かんたん写真プリント色合わせツール」として注目されている。

# 対談

## クイックカラーマッチの 成り立ち、そして未来…。

ある意味、ライバル関係にもある会社が手を組むことで実現した“クイックカラーマッチ”。その誕生までの課程、さらに今後の展開まで、開発に直接携わった皆さんに語っていただきました。於：EIZO本社ビル会議室(石川県白山市)



**諏訪** クイックカラーマッチ (Quick Color Match 以後QCM) のいわゆる言い出しっぺは、EIZOさんですよね。

**森田** そうですね。当社になります。

**諏訪** 最初に持ちかけられたとき、皆さんはどう思われましたか？

**大川** モニターとプリントの色の違いに関しましては弊社のお客様からも声が上がっていたので、もし実現したら面白いんじゃないかと。ちょっとした高揚感を感じました(笑)。

**諏訪** ちなみにそのときには、キャノンさんにも話をしているというのは聞いていましたか？

**大川** 具体的な会社名は出なかったと思いますが、他のメーカーさんにもお声掛けしていますということだったような。まあ、その辺は心得て参加させていただきました(笑)。

**諏訪** キャノンさんはどうでしたか？

**新徳** 率直に有難いお話だと思います。プリンタメーカーとしては、モニターに関してはユーザーさん任せになりますから。うまくいけばいいな、と。

**諏訪** キャノンさんもエプソンさんも、今後なにかが変わってくるなどというのは感じられましたか？

**大川** 我々がやりたいのは自社でユー

ザーを囲い込むとかではなくて、写真を楽しみたいお客様に最適な環境をお届けしたいというのが一番の前提としてあります。その第一段階の壁が破られたのかなと。これからドドツとなにかが起きるような感じはしますね。

**新徳** もう、まったくおっしゃる通りです。一番いい部分をエプソンさんに持ってかれました(笑)。

**大川** すみません。慎みます(笑)。

**新徳** それはともかく、こうしたコラボはプリンタメーカー同士では難しかったかもしれません。EIZOさんが間に入っていたことが大きいですよ。

**諏訪** いってしまえばガチンコのライバル会社ですからね。

**新徳** ええ。EIZOさんとアドビさんがあって、はじめて実現できたのだと思います。

**諏訪** そこでアドビさんです。ユーザーは一般に、自分の持っているハードウェアは否定したくないからソフトウェアを悪者にしちゃったりしますが、今回の話を持ちかけられていかがでしたか？

**栃谷** 最初にお声掛けをいただいたのは、去年の4月だったような…。

**諏訪** えっ！じゃあCP+まで一年もなかったんですね。

**栃谷** はい。4月ですね。私はPhotoshopを担当して20年近くになるのですが、カラーマネジメントに関しては当時から話題になっていました。といっても新米でしたから、お客様のほうが詳しくかったです(笑)。

**諏訪** 20年！Photoshopのバージョンでいうと？

**栃谷** 5.5でした。その当時すでに、上司からは(カラーマネジメントは)おまえのライフワークになるぞって脅されました(笑)。とにかくプロもハイアマチュアの方も、それぞれ要望があって、さらに使っている環境も全く違う。つまりそう簡単に答えなんか出ない。ですからEIZOさんからこのお話をいただいたときには、もしかしたらライフワークの半分くらいはこれで助かるかなという印象を持ちましたね(笑)。

**諏訪** 人生の半分ですか(笑)！

**栃谷** そうですね。いまでも当社への問い合わせの大半はカラーマネジメントに関するご質問なので。

**諏訪** ともあれ大きな枠組みが決まったのですが、そこから先は順調に進んだのでしょうか？ 連携のプロセスというか。

**森田** 各社とのヒヤリングを重ねた結



EIZO(株) 企画部

森田 美知太郎



EIZO(株) 映像商品開発部

前川 孝雄



アドビシステムズ(株) マーケティング部

栃谷 宗央



セイコーエプソン(株) プロフェッショナルプリンティング事業部

大川 泰輔



キャノン(株) インクジェットシステム開発センター

新徳 裕



司会・進行：写真家

諏訪 光二

# 写真が、プリントが楽しくなる！

## Quick Color Match 推奨機材



カラーマネージメントモニター  
ColorEdge CS2420(EIZO)



表示レタッチソフト  
Adobe Photoshop  
CC/CS6(アドビ)



プリンタ  
SC-PX3V (エプソン)



プリンタ  
imagePROGRAF  
PRO-1000 (キヤノン)

## 問い合わせのほぼ半分が カラーマネージメント関連ですから(栃谷)

果、かなりの部分解決できそうだ、という感触はありました。さらに当社にとって幸いなことに、皆さん当社からの要望に柔軟に対応いただけましたから。

**諏訪** エンジンというか軸は、EIZOさんがベースとなる部分を作ったんですか？ それとも4社で作った？

**森田** プリンタメーカーさんもアドビさんもすでにベースとなるものはお持ちだったので、そのプラグインを利用しようと考えました。

**諏訪** 既存のものをその規格に合わせてようという考え方ですね。いわゆる同時進行で進めていったと。

**森田** はい。もちろん、そこにEIZOからの要望もどンドン投げていきました。

**諏訪** それに各社が返していくと。

**森田** その通りです。

**諏訪** とはいっても、EIZOさんの要望を取り入れて、最終的にひとつのものにしていくというのは苦労があったんじゃないですか？

**大川** 実は、あまりすごい苦労をしたというような記憶はなくて…。というのも、ちょうどカラーマネージメントを意識した“Epson Print Layout”というソフトが完成したばかりだったので、かなりの部分で助かりました。

**諏訪** けっこう柔軟に作り変えられましたか？

**大川** そうですね。汎用性を持たせて作ったのがうまくいきました。

**諏訪** キヤノンさんはいかがでしたか？

**新徳** ちょうど我々も新しいプリンタ(imagePROGRAF PRO-1000)の仕上げ途中で、それに向けてソフトも新しく作り直している最中でした。ですからうまくタイミングが合ったのは確かです。

**諏訪** 時間的な制約はともかく、仕組みとしてはすんなり対応できましたか？

**新徳** 単体でのカラーマネージメントそのものは考えていました。でも、他社さんとの連携まではさすがに想定してなかったんで、適用できうる部分とできない部分をまずは検討しました。最終的にはうまくいきましたけど。

**諏訪** その点では、アドビさんのソフトなんかは意外と簡単に適応できそうなイメージがあるのですけど…。

**栃谷** 簡単、というよりは、逆にいいお膳立てをしていただいた、という方が表現的には正しいと私は思っています。弊社の場合は本国がアメリカなので、どうしても他社さんよりは反応が遅くなります。しかしEIZOさんは事前はかなり研究されていたようで、具体的な部分をピンポイントでご質問いただいたことで、すぐ助かりました。

**諏訪** ということはやっぱり、EIZOさんがプロジェクトリーダーで引っ張っていかれたと理解していいんですかね。

**森田** そう…なんですかね。

**大川** そうですよ。

**栃谷** 間違いありません。

**諏訪** 開発に苦労はつきものなのでしょうが、その辺のお話を…。

**森田** さきほど栃谷さんも言われましたけど、カラーマネージメントというのはとにかく奥が深いです。それを正面から説明しても伝わりにくいし、さりどて結果は目に見える。ですからボタン一発でできるくらいにならないとダメだってことになりまして…。プロジェクト名も“ボタ

ン一発”というので進めてきました。“ボタン一発の件で集まるんでよろしく”とか(笑)。

**新徳** たしかに最初の発信は“ボタン一発”でした(笑)。しかもボタン一発の後にいろんな操作が入ってはいけなくてまで釘を刺されて(笑)。結局はそれらを入れ込んでいく際の日程的な部分で多少の苦労はありました。

**栃谷** 私のほうは、作っていく過程では順調でした。が、いかんせんソフトメーカーということもあり、いわゆる“最終形態”が完全に見えていなかった。インターフェイスとか。で、開発の終盤でプレスリリースを出すときがあったと思うんですけど、本国に一応お伺いを立てて、推奨のコメントを出さなきゃいけない。そうしたら本国のほうから「で、それはうちでテストしたの？」と突っ込まれたんですね。あっ、まずいと思って(笑)。

**諏訪** そのテストはどうだったんですか？

**栃谷** 急遽うちのエンジニアを連れて、お伺いさせていただきました。結果的にはすごくシンプルなものでしたから、エンジニアからもすぐにOKが出ました。

**諏訪** QCMは各メーカーごとに推奨される機種があると思うのですが、その辺をお話ください。

**大川** エプソンですと、プロセクションシリーズの中でもK3インクを搭載した機種が一押しになっています。K3インクは3階調の黒インクで画像を形成します

## これからドドッと何かが起きる 予感がします!(大川)

# それが何より重要なのです。

## Quick Color Matchの かんたん手順!

クイックカラーマッチの起動画面。「プリンタ」と「用紙」を選んで画像をドロップするだけで、モニターの調整とPhotoshop、エプソン/キヤノンのプラグインソフトのカラーマネージメント設定がすべて自動で完了する。これまで必要だった専門的な知識や複雑な操作は一切不要、まさにボタン一発なのだ。



## 安心して作品づくりに取り組んで いただければ幸いです(新徳)

から、カラーマッチングには最適だと考えています。大判サイズのプリントで個展をやりたいというお客様にはA2サイズ対応のSC-PX3Vを、A3ノビサイズまでで楽しみたいお客様には、同じインクセットを搭載したSC-PX5VIIをお勧めいたします。

**新徳** キヤノンのプロシリーズでは、特に新しく出たimagePROGRAF PRO-1000がお勧めです。エプソンさんも新しいインクをアピールしていましたが、キヤノンもLUCIA PROというインクを新たに導入しています。高い色再現力と豊かな階調性! モニターで合わせていただければ、まさにその色が再現されます。ものすごくいいプリンタだと思っています。

**諏訪** 僕が想像していたよりも上の層というか、ハイアマチュアに振っているのですね。

**大川** A3ノビだとやっぱり小さい、物足りないという声を多くいただいています。自分で見るだけじゃなくて、もっとたくさんの人に見ていただくようなプリントができる機種を選びました。

**新徳** 最近のデジタルカメラはどんどん画素数が増えていますから、A2サイズを求めるお客さまが多くなってきています。せっかく色のコントロールができるなら、大きなプリントで迫力のある印刷を楽しんでいただきたいと。

**諏訪** もしかすると、大判とかにもソフトしていく可能性はあるのですか? 絶対に言えないとは思いますが(笑)。

**大川** 大判までいくと、それこそ専門的な知識を持った方が多いので、判断が分かれるかもしれませんね…。

**新徳** すでにワークフローが確立していますからね。それを変えてもらうのは難しいかもしれません…。

**諏訪** 皆さんが言いにくいようなので、僕が言います(笑)。大判プリンタを使っているプロの中にも“何にも分かって

いない”人がいっぱいいるじゃないですか。そうした人たちに推奨できるのでしょうか?

**栃谷** ソフトに関していますと、月々の使用料もかなり安くなっているので環境面でのプロとアマチュアの差はなくなりつつある。でもそこで立ちはだかるのが、何度も出てくるんですけどカラーマネージメントなのです。私にしてみれば、アマチュアならQCMで負担を減らして写真を楽しんでほしいです。でも、プロならそこでちゃんとした知識を身につけてほしいですね。

**諏訪** けっこう今は、プロでもできる人とできない人の差が激しくなっていますよね。キヤノンさんはいかがですか? 重鎮から若手までプロの声を聞いていると思いますが。

**新徳** プロの方であっても、使えるところは使っていたらればと思います。従来手がかかっていた部分がスムーズに進められるのなら、作品づくりに専念できるのですから。プリントは好きでも、作業そのものが好きでない方もいらっしゃいますから(笑)。

**諏訪** エプソンさんはどうでしょう。プロを視野に入れたQCM。

**大川** プロの方をターゲットにするなら、少しあつらえを変えたほうが良いと考えています。展示する場所や照明によってプリントペーパーを変えたり、必ずしも純正紙だけが使われるとは限らないので。

**諏訪** なるほど。では肝心のEIZOさんは?

**森田** QCMの目指すところは、端的に言うしまうとモニター、プリンタ、レタッチソフトの設定作業の標準化です。そういった意味ではプロカメラマンも含

めて最初のとっかかりとしては使えるんじゃないかなと。まずファーストステップとしてQCMを使っていたら、そこからのステップアップとして自分なりの設定を追い込んでいただくというのもありかなと思います。

**諏訪** EIZOが絵作りの主導権を握っている、と考える人がいるかもしれませんが?

**森田** そういった意識はありませんね。あくまで各社さんがICCプロファイルをベースにやられているものを、QCMが簡単にセッティングできるというだけなので。

**大川** EIZOさんが絵作りをされるというわけではなく、モニターを理想とする設定状態に持っていくソフトです。これまで20ページも30ページもあって、1ページずつ読んでいかないうまくできなかった設定が一発でできるようになった。さらに軸足が決まったことでプリンタとインクごとの発色の違いが把握できるようになった。弊社とキヤノンさんの絵作り思想の違いももちろんあるので、絵作りのイニシアチブそのものはお互い握ったままですね。

**新徳** はい。キヤノンのプロシリーズもPIXUS PRO-10Sの顔料とPIXUS PRO-100Sの染料でそれぞれ特徴が違います。PRO-10Sの色再現性やPRO-100Sの鮮やかさなど、それぞれの良さがありますので。色を合わせていただいた上で、あとはユーザーさんの好みに合ったプリントを選んでいただく。いろいろな種類の、さまざまな印刷をストレスなく楽しんでいただければと思いますね。

**諏訪** QCMが浸透してくると、これまでEIZOさんが作り上げてきた“ColorNavigator 6”は不要になるのでは、という話は出てこないですか?

**森田** それは感じていません。手軽さではQCMですが、ユーザーの使い方に応

実はプロでも分かっていない  
人がいます!(諏訪)

## EIZO本社工場

EIZOモニターの生産拠点となるのが石川県にある本社工場。工場内は女性が多いのが印象的。ColorEdgeは「北陸の女」によって作られているのだ。ColorEdgeは念入りな調整と厳しい検証工程を経て製品化されている。電磁波を測定する電波暗室もその一つ。



## ” 合い言葉は“ボタン一発！” これだけは今後也不会変わります (森田)

じたきめ細かなセッティングができるのがColorNavigator 6の強みですから。 諏訪 僕はColorNavigator 6対応のモニターを使っているの、分かって質問しました(笑)。でも、より手軽なQCMに流れるユーザーもいるはずですよ？

森田 正直、そういったことも狙っています。いかにせん、これまではColorNavigator 6しかなかったの(笑)。でもこれからは選択肢ができたということです。あるいはQCMからColorNavigator 6にステップアップしていただけたとも考えています。

諏訪 ぶっちゃけ、最初からモニター通りの色にならない方が、インクも紙も売れませんか(笑)？

新徳 いやいや、そこは強く否定させてください(笑)。思った通りに色が出ないのは、ストレスでしかない。つまり印刷が楽しくないということです。そういった、いわば“手続き”のような部分はなるべく簡単に済ませていただくに限ります。重要なのはその先です。いろんな設定で追い込んだり、作品づくりのほうを突き詰めていっていただいたり…。これはキヤノンがエプソンがというわけではなく、印刷というものが盛り上がっていきけるほうが有難いわけですから。

諏訪 紙なんか売れなくてもいい？

新徳 いやあ。売れたほうがいいです(笑)。ですが、ポジティブな楽しみ方をしていた上で売れば、ということです。

大川 モニターとプリントの色は合わないもの、と最初から諦めてしまう方がインクもペーパーも消費されなと思います。それよりはまず思った通りのプリントが出てきて、そこからさらにスキルアッ

プ、作品力アップを狙っていただけの方がお客様にとってもプラスですし業界としても活性化しますから。

諏訪 今のところ、現在どちらのプリンタも用紙の対応が3種類ですよ。これをもっと広げているんな紙に対応したいとか考えはありますか？

森田 実はCP+で一番多くいただいた要望がそれです。当初は選択肢が少ない方が分かりやすいのでは、ということで絞らせていただきました。でも、CP+の会場や営業サイドからお客様の声を聞きますと、「私が使っているあの紙に対応してよ」というのがやっぱりあります。 ◆

諏訪 編集部からの乱暴な意見として、どうせならカメラの液晶モニターもEIZOが管理しちゃえばって言うてませんか??

前川 いえ、これは実際に話にはよく出てきます(笑)。

森田 言われますね。あとは小型のカラーエッジを作ってほしいとか(笑)。

諏訪 まあ、現実にはコストの問題がのしかかってくるんでしょうけど(笑)。それはさておき、せっかくメーカーの枠組みを越えて作り上げたものですから、今後このシステムをどう発展させていきたいかっていう話を聞かせてください。

大川 具体的には用紙の種類をもっと増やしたいですね。いろんな紙を使うお客様にこの恩恵が得られるように。

新徳 アドビとしましては、海外での展

開ですね。これ、言っちゃっていいのかな？

前川 海外展開としてはフォトキナに向けて英語版をリリースできるように開発を進めています。

諏訪 そういえばMac版も出してほしいなあ。

森田 日程的な問題もありまして、まずはWindows版を出しましたが、意外とMac版の声が多くて…次のバージョンアップでMac版を公開できるよう、鋭意、努力しています。

新徳 なんだ、やるんだMac版(笑)。初めて聞きましたよ。

森田 すみません。Mac版はやりませぬ。蛇足ですが、Photoshopに関してはまったく心配していませんから…(笑)。

新徳 アドビとしてはまったく問題ありません。が、Macとなるとプロの比率が非常に高いし、必然的に印刷所とのやり取りも必要になってくる。その部分も含めて、Mac版ではプラスアルファがあった方がいかな、と。

新徳 キヤノンの社内でも、紙の種類を増やしてほしいのと、Macへの対応を望む声が多くありました。Macをご使用のお客様にはプリントにこだわる方も多いためです。

諏訪 EIZOさんとしては今後についてどうお考えですか？現状はMac版で手一杯かもしれませんが(笑)。

森田 用紙、海外展開、さらにMac版も含めて、とにかくこのQCMの手軽さ、楽しさを広めていきたいです。一方で“ボタン一発”のコンセプトは堅持していかなくちゃならない。いろいろな機能を追加していき、最初のコンセプトがブレてしまいうことだけは避けたいですから。

諏訪 みなさん、今回はありがとうございました。

” 秋にはMac版をリリースする  
予定なのでお楽しみに!(前川)